

黒目は白日？

籙野寿雄

ニューヨークの郊外に住みついて半年経った頃、新聞でこんな文を目にした。

Many can't see past the black eye Congress has received from ethics imbrogio (1)

“Black eye” (黒い目)との初対面だった。いずこも同じ、政治倫理問題で連邦下院の多数派である民主党が大混乱に陥っている。何かいい手はないか、と神風を頼りにしているけれども、それは列車事故の残骸をかき分けてバラ銭を拾い集めるようなもの。こう書いてきて「議会が受けた『黒い目』がなくなるのを見通せない人が多い」と続く。こういう文脈に置けば「黒い目」がどういう意味を持

つか推測がつく。

日本で同じような記事を書いたら、どんな表現になるだろうか。「国会を見る国民の不信感はなくならない」「国会を見る国民の白い目は簡単には消えぬ」。そう、“black eye”は日本語ならさしずめ「白い目」だ。黒と白の対照の妙に魅せられたせいかな、この言葉はその後よく目につくようになった。もともとボクシングなどで殴られた時にでる目のふちのアザのこと。例えば、有名なコラムニストのラッセル・ペーカーが生い立ちを綴った本に、

“My nose was bloodied, my lips split, my eyes blackened, and my face swollen for

days afterwards.” (2)

という文がある。ガキ大将にやられ、鼻血は出るは、唇は割れるは、目のふちは黒ずむはで、顔はその後何日もはれたままだった、というのだ。転じて打撃、傷、損害さらには汚点、汚辱、不名誉、非難などを表す譬えとして使われている。新聞などに登場するのは比喩としての用法が圧倒的に多い。もう二つだけ紹介する。

不景気風に吹かれているうえに暴力ざたの多発が報道されて、観光客もビジネスマンも二の足を踏む一九九〇年のニューヨーク。冷たい視線にさらされ、さえないクリスマス商戦は商工会議所会頭もあきらめ顔だ。新聞に

紹介されていたばやきの談話はこうだった。

“Black eyes take a while to go away.”

〔落ちた評判が回復するには、いましばらく時間がかかる〕(3)

九一年の「証券不祥事」が日本国内で暴露される前、ニューヨーク・タイムズ紙が、Financial Giant's Slippery Slope、「金融界の巨人の滑りやすい斜面」という見出しの長い記事を載せた。証券業界で圧倒的な力を誇る野村証券のあれこれをつぶさに書き込んだ東京発の特集記事。目つきの鋭い田淵義久社長(当時)がくわえタバコに火をつけようとしている大きな写真もつけてあった。タバコが米国内でどんな扱いを受けているか、とくと承知のうえでの編集だ。アメリカ人記者の「白い目」が突き刺さるような記事のなかに次のような一文があった。

The firm suffered a black eye with the publication last year of “The House of Nomura,” a book which suggested Nomura routinely breaks rules —— manipulating prices, for example. (4)

株価操作など野村証券のルール破りは日常茶飯事といわんばかりの本で名誉を傷つけられたとして、同社は著者を告訴したのだったが、その後、「不祥事」が明らかになった。責任を取って会長を辞任した田淵節也氏が国会の証人喚問で「大蔵省から指摘を受けていた」ことを認めざるをえなかった。二人の田淵氏は、この後も相談役の部屋からにらみを利かせていたが、九七年の二度目の「証券不祥事」でついに引退を余儀なくされた。

ところで「黒い目」ではこんなこともあった。ニューヨーク州の自動車運転免許証に目の色を記入する欄がある。「Black」と書いて申請したはずが、受け取った免許証は「BR」となっていた。brown 茶色である。「BR」と思うと、日本で六十五歳の男性が「テレビの外国映画で感心するのは「吹き替え」のせりふです。この間、金髪碧眼のおやじが「わしの目の黒いうちは絶対に許さん！」と書いていました」(5)と投書していた。

黒と白でも、右とは逆の例——白いペンキで塗ることから、間違えたことや欠陥、都合のわるいことなどを覆い隠す意味にも用いられる「whitewash」はさしずめ「墨で塗りつぶす」に当たりそう。白く塗るといえば、アメ

リカを歩いていると白壁の住宅や白いフェンス、窓枠などが多いように思う。例えば大統領官邸。ニクソン大統領の演説起草者をしたこともあるウイリアム・サファア氏によると、一八一四年にボトマック川を遡ってきたイギリス軍に焼かれたが、再建の時に白いペンキが使われたので、官邸は以後、非公式に「White House」と呼ばれるようになった。

セオドル・ルーズベルト大統領(一九〇一—〇九)が官邸の用箋を「Executive Mansion」から「The White House」に変更することで、この名称を公式のものにしたのだという。(6)

「White lie」という言ひ方もよく目にする。「白をきく」「白々しい」と似ているようだ。違う。普段の暮らして体重のさばを読んだりたばこは吸っていないなどと言ったりすること。悪気のないごまかし、方便としての嘘、あるいは、交渉テクニクとして相互に許容しあえる嘘だ。

In everyday life, such plays might be dismissed as white lies or oversight. (7)

それならば、許せぬ嘘、「真っ赤な嘘」は

何と云うか。“red lie” という言い方はないようだ。“black lie” も辞書には見当たらないが、サファイア氏が“white lie”との対比をはっきりさせた文脈の中で使っていたのを見たことがある。彼の造語だろう。次の文章である。

In light of that revelation of the reality of power, consider four white lies that still veil the truth :

1. The Gorbachev attempt to save Saddam was “useful”...
 2. Our objective is to free Kuwait but not to overthrow Saddam Hussein...
 3. The U. N. Security Council calls the shots.....
 4. We expected fierce resistance from well-dug-in Iraqi troops...
- Promise of victory in the face of sure defeat is not a white lie but a black one. (8)

アメリカが九一年の湾岸戦争で、ゴルバチョフ・ソ連大統領の仲介を断ってイラク軍と地上戦を始めた時のコラムである。権力の実相が明らか(アメリカ軍の勝利が確実)にな

ったのを機に、アメリカ政府がしていた戦略上の嘘四つのことを考えてみようと言つて①サダム・フセイン・イラク大統領を窮地から救い出そうとしたゴルバチョフ大統領の試みは「有益」だった②アメリカの目的はフェイン政権を転覆させることではなくクエントを解放することだ③国連安保理事会が指揮をとっている④守りを固めたイラク軍の激しい抵抗にあいそうだった―のそれぞれについて「方便」の「方便」たるところを解説したものだ。サファイア氏が「敗北が確実なのに必ず勝つなどと公約するのは、嘘も方便ではなく、真々赤な嘘というものだ」と断罪した相手はもちろんフセイン大統領。

日本語の色としての「赤」は「明」からきているので、「真々赤な」嘘は「明らかな」嘘というのだが、“black lie”なる英語を見た後では、日本語でも嘘の濃度は「真々黒な」とした方が高まるようにも思えてくる。「黒」の用法の一つに日本では有罪、犯罪容疑の濃厚さがあるが、旧約聖書は罪の色に「緋」「紅」を当てている。

Though your sins be as scarlet, they shall be as white as snow; Though they be red

like crimson, they shall be as wool. (たとへあなたの罪が緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊のように「白く」なるのだ) (9)

ナサニエル・ホーソンの「緋文字」(The Scarlet Letter)もこの意味である。女主人公のドレスに縫い付けられた緋色のAの字は Adulteress 不貞の女の頭文字である。

「白」と「黒」に戻るが、羊の毛を純白の代名詞に使うことはみ出しもの、厄介者、面汚し、白眼視される対象の譬えとしての“black sheep” という言葉を生み出している。たとえば、ギリシャの欧州連合(EU)加盟に反対する投書に対する、二通の反論の共通見出しにこうあった。

Don't make Greece Europe's black sheep. (ギリシャをヨーロッパの除け者にするな) (10)

筆者も九一年夏、スペインの地中海沿岸を旅行中にさまざまな色の羊が混じった群れに出くわしたことがあるが、確かに黒い羊は数が少なかった。

「黒」といえば、“black rose” という表現に出会ったこともある。

On the night Mr. Koppell lost the pri-mary, Mrs. Manning sent him a dozen black roses with a message that, she said, amounted to, “We told you so.” (11)

ニューヨーク州のあるカウンティ（日本では郡と訳されているが、実態からすれば県といった方がよい）で起きたレイプ事件の処理をめぐる、犯人に甘いと女性団体などが騒ぎだした。州知事が乗り出して同カウンティ検事正を首にし、州司法長官に提訴し直させた。同長官はこの後選挙（同州の司法長官職は公選）、それも民主党の予備選挙で落選してしまった。首になった検事正の奥さんがすかさず「いわんこっちゃないでしょ。ざまあみやがれ」といわんばかりに「ダースほどの「黒いばら」を送り届けたというのである。黒色のばらが本当にあるのかどうか、えんじの濃い色なのか、あるいは、全く別物なのか。筆者には分からないが、いずれにしても不吉な代物であることは間違いない。ちなみに、俗語辞書によると、“black rose” は

トナム戦争当時、アメリカ軍兵士の間で性病の隠語として使われていたという。(12) いずれも、ばらが聖母マリアと深く結びついている宗教文化のなかでの “black rose” の用法である。

二十数年前のことだが、大蔵省の役人が在米日本大使館に赴任する途中、立ち寄ったハワイで「コーヒーを注文した。“black or white?”と尋ねられて、とっさに出た返事は「ブラック・アンド・ホワイト」。ウエイトレスは目を白黒させたようだ。とはいっても「目を白黒させる」という言い方は英語にはないようだが。同じころワシントンにいた筆者が本人から聞いた話だ。

色にしる、仕種にしる、表現法あるいはその比喩としての使われ方が文化によって異なるだろうことは、容易に想像がつく。もちろん、似た譬えがあってもおかしくない。ここでは日本とアメリカの、「白」と「黒」の、それも対照的な意味を表す使われ方に刺激されて、いくつかの英文例を紹介した。

翻訳は、時に不可能と思えるほどむずかしい。だが、それを生業としない身には、幸いなことに、気儘な“文化訳”“文脈訳”に身と心を遊ばせる楽しみが許されている。筆者

が読めるのは英語だけだし、アメリカにしか住んだことがないので大口は叩けないけれども、アメリカに限っても、新聞その他の印刷物から用例を拾ってると、まさに「色々々々」「仕種は種々」と興味は尽きなく。

- (1) USA Today 1989. 5. 31
- (2) Russell Baker: Growing Up (A Plume Book 1982)
- (3) New York Times (NYT) 90. 12. 2
- (4) NYT 1991. 3. 10
- (5) 朝日新聞日曜版「いわせつもらせ」(93・4・4)
- (6) William Safire: Safire's New Political Dictionary (Random House 1993)
- (7) NYT 94. 8. 13
- (8) NYT 91. 2. 25
- (9) イザヤ書第一章一八節
- (10) NYT 91. 5. 1
- (11) NYT 96. 7. 24
- (12) Random House: Historical Dictionary of American Slang (1994)